

## [解説]

## 情報システム学会における研究会活動について

杉野 隆

## 1 はじめに

情報システム学会では、会員らが、研究会形式によって情報システム学に関する研究活動を支援している。今年度（2008年度）には、五つの研究会が活動している。研究会活動の企画、管理は、理事会において企画委員会が担当している。本稿では、研究会活動の趣旨、現在までの九つの研究会の概要を紹介し、これらの研究会の研究テーマが、情報システムに関する分類軸から見てどのように分布しているのかについて、若干の考察を行う。最後に、研究会の運営を活性化させるために企画委員会から要望したい事項について述べる。

## 2 研究会の趣旨

研究会は、ある研究テーマについて関心を持つ会員らが、共同で討議、研究することにより、研究成果を得ようとする学会内組織である。学会の研究会規定第1条では、研究会の目的を「研究会は、情報システム学およびその周辺分野から重点的な研究テーマを選定し、そのテーマに関する研究、事例交換活動等を促進するとともに、会員間の情報交流を深めること」と述べている。

研究テーマの範囲については、研究会規定では「情報システム学およびその周辺分野」とのみ規定しており、外延はかなり広く想定されている。情報システム学の概念は未だ明確にされていないが、たとえ明確化されたとしても、学

問の性格上、周辺領域には大きな自由度が残されるであろうと思う。

研究成果は、研究会に参加した会員たちの共有財産であるとともに、広く学会全体の共有財産としていただくことを予定している。このことは、研究会への学会から支給する（少額ではあるが）補助金が研究会活動の基本となっており、補助金は会員から頂いた会費を原資としていることから、当然のことであろう。さらには、学会は、学術研究によって社会に貢献する組織であるため、これらの研究成果は社会にいずれは還元されるべきものと考えられる。

## 3 これまでに設置された研究会

研究会の活動期間は、規定により2年間とされているが、さらに申請により、1年間の延長を認められる。これまでに設置された研究会を表1に示す。

## 4 研究会テーマの分類

ここでは、情報システム研究の分類軸としてしばしば参照される R. D. Galliers の情報システム研究アプローチの分類枠組み<sup>1)</sup>と、それを改良した小幡らの分析枠組み<sup>2)</sup>を参考にして、研究会テーマの分類を試みる。これらの枠組みは、研究対象と研究のアプローチ（研究対象の認識枠組みと研究方法）という2次元から構成されている。ここで、経験的アプローチとは、我々の知覚を通して得られる経験を立論のよりどころとするアプローチ、解釈的アプローチとは、あらゆる社会的存在の意味は、観察者に無関係に客観的に存在するのではなく、テキストの創始者とその解釈者との間で交わされる相互主観的な対話を通して生成されるとするアプローチをいう。また、中間的アプローチは、科学的側面と解釈的側面を含むアプローチである。

Takashi Sugino

国土舘大学情報科学センター

Center for Information Sciences,  
Kokushikan Univ.

[解説] 2008年6月30日受付

© 情報システム学会

表1 これまでの情報システム学会の研究会一覧

研究会名	実施年度	研究テーマ	主査/幹事
①グローバル・アライアンス研究会	2005～ 2007	IT 業界におけるグローバル・アライアンス戦略と留意点(国内での教育研修のあり方, 成功要因, IT ライセンスの相互認証制度など), 及びヒューマンリソースの多角的考察(先端的技术パラダイムの影響を含む) など, 事例や現場に密着した視点とアカデミックな視点を融合させ考察する。	榎本健吾/ 柴山浩
②シンビオテック情報システム開発	2005～ 2006	“端末の先に人在りき”という立場から, 情報の創造, 流通, 消費という視点に立って, 情報システムの背後にある組織, 組織的意思決定過程の課題, 社会的にオープンな自律的意思決定過程の課題を検討する。その上で, 人と共生する情報システムの在り方を求めていく。	土方正夫/ 鈴木重徳
③生圏情報システム	2005～ 2007	ギリシャ時代以降, 人間が環境をどのように認識し, どのような思考プロセスでこれに対応, 行動してきたか倫理的な観点も含めて整理する。技術関連の発達にともない, これら認識と思考・行動プロセスをどのように変革すべきか, 生圏倫理学の成果を学ぶ。その上で, 生圏としての情報システムのあるべき姿とその構成の道筋を求める。	杉野隆/ 芳賀正憲
④人間の情報活動としての業務プロセスの可視化	2005～ 2006	人間の情報活動を業務プロセス (Business Process) として捉え, 米国の業界標準である BPMN (Business Process Management Notation) を利用し, 業務プロセスの可視化, 業務分析等を行い課題の整理・分析を行う。	宇野沢庸弘/ 菊田朋文
⑤情報システムのあり方を考える会	2006～	実業界・社会において問題となっている課題を情報システムにより解決する可能性, また情報システム構築・運用上の問題等を含めた情報システムそのものについて広い視点より討議し問題意識を深め, 提言する	伊藤重隆/ 高橋正子, 久保田光一ほか
⑥産業界からの論文発表を促進するための研究会	2006～	産業界からの論文投稿を促進するための環境整備と, 具体的な企業事例を体系化・抽象化し, 学術論文に纏め上げる試みを, ケース・スタディを通して行う。	高木義和/ 原潔
⑦重要インフラの ICT 依存性解析と CIIP (重要インフラ情報防護) のあり方研究会	2007～	重要インフラにおける ICT の導入状況と依存性の解析を進めながら, ICT 障害に対する潜在的な脆弱性を抽出し, 欧米で専攻する相互依存性解析の取組みなども調査・参照しながら, 日本における CIIP (Critical Infrastructure Information Protection : 重要インフラ情報防護) のあり方についての議論を展開する。	渡辺研司/ 織茂昌之, 野山英郎

⑧情報社会における小・中・高の（数学教育を含めた広い意味の）情報教育を考える会	2007～	情報社会における教育の諸課題の検討、現在行われている「情報教育」の実態調査を行う。その結果に基づいた研究会の内部討論を経て、今日の情報社会における「数学教育も含めた広い意味の情報教育」の洗い直しを行っていききたい。	町田彰一郎/本郷健
⑨情報システム教育に有効な事例の整備に関する研究会	2008～	情報システム教育の諸機会において、学習者の自立的な学習意欲を喚起し、その理解・分析を通じて、情報システムに対する適切な態度、基本的知識を身につけるために有効な「事例」の収集、加工、及び、提供の方法を研究する。	江島夏実/石田充利

表 2 研究会テーマの分類

アプローチ	経験的アプローチ	中間的アプローチ	解釈的アプローチ
例	理論証明, 実験研究, フィールド実験, ケーススタディ, サーベイ	予測と未来研究, シミュレーション, 役割ゲーム	主観的論争的研究, 記述的解釈的研究, アクションリサーチ
対象			
社会			
組織/集団	①, ④	⑦	②
個人			
技術			
教育	⑥, ⑧, ⑨		
方法論			
研究目的			
理論構築			
理論検証			
理論拡張			
基礎理論			③

注 1 Galliers の分類軸における研究対象として、教育、基礎理論を追加した。

注 2 ○で示す数字は表 1 における研究会の番号である。

もちろん、小幡らが前提とした情報システム研究は主に経営情報学を想定しており、情報システム学会の追及する情報システム学とでは、研究の地平は一致しないであろう。ここでは、小幡らの分類軸に、対象として教育、基礎理論を追加したうえで、研究会テーマをプロットしてみる（表 2）。現在の研究会テーマのスペクトラムを収めるには、対象を拡大しないとおさまらないと思われるからである。教育は、本学会における人材育成への関心を示しており、基礎理論は、同様に哲学的基礎理論への関心を示している。方法論という対象は、情報システム学固有の方法論と解釈しており、科学の基礎理

論としての哲学などは方法論とは別にして見た（異論はあるであろう）。

表 2 から、現在までのところ、経験的アプローチに基づく研究会が多いことがわかる。情報システムの実践との連携を重視するという本学会の性格から予想されることである。その一方では、理論の構築、検証、拡張といった情報システム学の理論確立のための試みに今後挑戦していただくことは、情報システム学の確立にとってやはり重要なことであろうと考える。

## 5 要望すること

現在実施中の研究会, および今後研究会を組織しようとお考えの会員方に企画委員会として, 2点お願い申し上げます。

### 5.1 研究会運営のオープン化

特定のテーマについて掘り下げた議論を行うために, 研究会メンバを限定するという運営方法もあるであろうが, 学会の他会員にも参加の機会を与えていただき, いわば“同好の士”を広く集めることにより, 研究会の成果をより実りあるものにしていただきたい。各回の会合の開催についても, 学会のメーリングリスト, メールマガジン, 学会 Web ページなどを利用して, 本学会の全会員に案内していただきたい。

### 5.2 地域ごとの研究会の設置

現状では, 研究会の開催地は東京近辺に限られているが, 会員は全国に散らばっている。本学会の Local Chapter (支部) への第一歩として, 地域独自の研究会を組織し, 各地域における情報システム学の普及にご協力願いたい。

## 6 おわりに

これまで 3 年間を超える本学会における研究会活動の概要を紹介し, 情報システム研究の枠組みにおいてどのように位置づけられるかを試みた。この分類軸へのプロットは各研究会の関係者の同意を得たものではないが, 今後の研究会活動の参考になれば幸いである。また,

今後の研究会活動の発展のためをお願いを述べた。

## 参考文献

- [1] Galliers, R.D. (1992). "Choosing information systems research approaches", in R.D. Galliers, ed., *Information systems research: issues, methods, and practical guidelines.* . pp.144-162. Oxford: Blackwell Scientific Publications.
- [2] 小幡孝一郎・柴直樹・松下倫子 情報システム研究の分類軸, 経営情報学会誌, Vol.6, No.3, 1997, pp.124-129.

## 著者略歴

国士舘大学情報科学センター教授。情報システム学会副会長, 企画委員長。

1969 年東京大学工学部計数工学科を卒業し, 同年八幡製鐵 (現: 新日本製鐵) に入社。情報システム部門に在籍し, 製鉄所の原料生産管理システム, 本社では経営計画関連システムの開発に従事した。その後, 社内ネットワークシステムの企画, 開発, 運用に従事し, ネットワーク, 情報セキュリティ分野に関心を持つに至った。1999 年に新潟国際情報大学, 2001 年に現職。1946 年 8 月生まれ, 東京都出身。